

れる時、往々にして、翻訳及び書き換え (re-writing) の過程を見落としがちであるが、「村上春樹の影響を受けている」台湾作家たちは、村上の翻訳者（多くは頼明珠）の直接の影響を受けているのである。そして、台湾の読者の村上翻訳文學受容の独特な現象は、もう一つの翻訳—文化翻訳となつて現れるのである。書き換え (re-writing) の持つ創造力は、文學や文學史だけでなく、翻訳文學を通じて、ある程度歴史をも書き換え (re-write) うことの、本書は論証しているのである。

小特集 *中国語圏の村上春樹

台湾の社會が変化していく限り、台湾における村上春樹の翻訳文學および文化翻訳は変化しつづけるのであり、同時にこうした台湾の村上の翻訳文學およびその文化翻訳が、台湾の社會の歴史を多少なりとも書き変えていくこともあり得るのだと言えよう。

本書において張は、二冊の村上春樹文學研究書、ハーバード大学教授ジエイ・ルーピン氏の Haruki Murakami and The Music of Words (中国語訳『聽見100%的村上春樹』) (2004) 及び藤

井省三の『村上春樹のなかの中国』(中国語訳『村上春樹心底的中国』) (2008年) の翻訳が、台湾の村上讀者にとって、重要な書き換え者 (re-writer) となつたと述べているが、台湾における村上文學研究書を中国語で執筆した台湾出身の張もまた、台湾の村上翻訳文學／文化翻訳にとつて、重要な書き換え者であることは間違いないであろう。

(まつざわ・ひろる) 東京大学大学院博士課程／ハーヴィード・イエンチン研究所訪問研究員)

「ポストモダン文学」としての村上春樹文学

王 姿雯

楊炳菁著
後現代語境中的村上春樹

中央編訳出版社
2009年 [二・七九三円]

楊炳菁は、北京外語大学日語系で日語語言文学学士号と修士号とを取得後、二〇〇九年に吉林大学文学院比較文学与世界文学専業文学で博士号を取得、現在は北外大日語系副教授を務める新進氣鋭の現代日本文学研究者である。楊氏は二〇

〇六年に大東文化大学の訪問研究員として日本に一年滞在したが、その間にも博論にあたる本書の構想をしていたのであろう。

本書は序章と終章を除いて四章からなる。第一章「後現代語境中的村上春樹」

創作 (ポストモダン的コンテクストにおける村上春樹文学)」では、村上の成長史と戦後日本史をたどりながら村上文学の起源を考察している。楊氏によると、一九

中国年鑑 2011

◎好評発売中◎

中国研究所 編・発行

毎日新聞社 発売

1955年創刊。現代中国に関するあらゆる分野の最新情報、基本情報を提供。

B5判 498頁

価格: 18,900円(税込)

◆特集

波立つ海洋・動き出す内陸

建国から60年が過ぎた中国が大国として求められる、内外で抱えるさまざまな課題を取り上げた論考を掲載。

◆動向

政治、外交、経済、対外経済、文化、社会

◆要覧・統計

国土と自然、人口、国のしくみ、軍事、少数民族、華僑・華人、香港、マカオ、台湾、国民経済・国民生活、財政、金融、証券・保険、農業、工業、資源・エネルギー、交通運輸、対外経済、知的財産権、労働、暮らし、社会保障・医療制度、環境問題、NGO・NPO、教育、文化、宗教

◆資料

統計公報、重要文献、主要人事、2010年日誌ほか

※お問い合わせは中国研究所事務局まで。

一般 中国研究所

〒112-0012

東京都文京区大塚6-22-18

TEL: 03-3947-8029

FAX: 03-3947-8039

e-mail: c-chukun@tcn.catv.ne.jp

URL: http://wwwsoc.nii.ac.jp/ica/

七九年『風の歌を聴け』で正式に作家デビューしてから二〇〇〇年までの村上の創作は、「二つ目の十年」と「二つ目の十年」との二期に分けられる。第一期の代表作が『風の歌を聴け』のほか、「世界の終りとハードボイルド・ワンドーランド』(一九八五年)と『ノルウェイの森』(一九八七年) (以下『世界』と『森』と略す) であり、これらの作品の特徴は洗練さであるという。第二期の代表作としては『ねじまき鳥クロニクル』(一九九四

タツチメント) の態度が顕著となつたと楊氏は指摘している。二〇〇二年の作品『海辺のカフカ』に対しても、歴史の忘却によって個人の傷を癒す傾向が見られると現代日本文学專攻の小森陽一・東大教授が厳しく批判しているが、楊氏は逆にこれを小森氏の読み違えとして退けている。また村上は翻訳家でもあるため、翻訳を通して村上文学の中で「文化越境」の状況が窺えることも論じている。

第二章「村上春樹小説的後現代特徴与芸術突破(村上春樹小説でのポストモダンの特徴と芸術上の突破)」は村上作品における「ポストモダン」の特徴、日本近代文学史における村上文体の新しさを指摘している。楊氏によれば、村上作品は大

いる。

このような楊氏による日本語の語りの言語的特徴からは、三谷邦明の論点が想起されることだろう。三谷は日本近代小説の特徴として三人称が主語となる際に文末の「らしい」などの推量詞を省略することによって「三人称／過去」と「一人称／現在」という重層的な構造が現れる、と論じている（『近代小説の「語り」と「言説』、有精堂出版、一九九六年）。

確かに楊氏が挙げる三つの特徴は日本語の言語的特徴と関係しているのであらう。柄谷行人は、言文一致運動で行われた言語実験によつて近代文学の特殊性——つまり楊氏の提起する三つの特徴——が成立し、作家たちの創作もこれによつて制限されるようになつたと指摘している（『日本近代文学の起源 増補版』岩波現代文庫、二〇〇八年）。漢文学の教養があつた明治期の代表的作家漱石が、言文一致による創作活動において言語的実験を行つたことは想像に難くない。村上が眞に言文一致以来の束縛を解いたのか否か——これは大変興味深い問題

である。本書も言及しているように、村上本人は今まで日本文学の影響を受けていないと語っていたが、例えば『海辺のカフカ』は日本文学の遺産を取り入れており、村上はある時点から積極的に日本文学を読み直し、先人の言語的実験に気づいたという。

『世界』、『森』、『ねじまき鳥』、『海辺のカフカ』を詳細に分析した第三章「我的形象化与他者化（自我的形象化と他者化）」及び第四章「歴史的橋梁化与隱喻化（掛け橋および隱喻としての歴史）」は、『世界』と『森』では村上が「自我」と「他者」の関係を語り、自我的イメージを登場人物に投射することによって「自己」を探究しており、「ねじまき鳥」と「海辺のカフカ」では歴史を媒介または隱喻とし、歴史に対する開放的な態度を取ることによって、読者と共に歴史や暴力の諸相を思索している、と指摘している。

以上のように、本書は「ポストモダン」の現在において、村上文学を「ポストモダン文学」として位置づけ、さらにその意義を解明している。その手掛かりとし

て、近代文学における二大テーマ——自己認識と歴史叙述——がどのように戦後新世代である村上によって再認識され、表現されているのか、という問題を『風の歌を聴け』から『海辺のカフカ』までの作品を論じて分析したのである。一九七二年生まれの楊氏は「文化大革命」後期の出生であり、本書の出版は所謂「七〇后」世代の日本文学研究が世界的レベルに達していることを示すものであることは、藤井省三が序文「中国一七〇后」の村上春樹論で指摘している通りであろう。確かに、『後現代語境中的村上春樹』の出版を通して、中国の「村上文学研究」は世界に広がつていくに違いない。

（おう・しぶん 東京大学中国語中国文学専門分野博士課程）